

私の戦争体験

S.M. 1979年新潟県生まれ♀

戦争を経験した祖父を持ち、幼いころから戦争への思いが強かったものの、社会人となって8年が過ぎてしまいました。30歳を迎え今後の人生を考えたとき、長年の自分への問いかけであった「戦争を繰り返さないために自分ができること」の答えを見つけたいと思い、大学院入学を決意しました。平和教育を研究テーマとし、現在働きながら大学院に通っています。

「私の戦争体験」を書くにあたり、初めに高校生当時の私の“戦争に対する思い”を紹介します。これは1997年8月14日の朝日新聞「声」欄に『知らない世代 今することは』という題名で、実名(東京都 高校生 18歳)で掲載された私の戦争への思いの原点です。

『戦争を体験した方たちが戦争について語るということは、私たちが想像する以上につらいことのようにです。

私の祖父も戦争を体験した一人です。当時、祖父には妻子もなく、先頭を切って敵に向かって行ったそうです。しかし、砲弾は放物線を描いて落下するもの。後ろからきた仲間たちの方が次々とやられてしまったということでした。

この話は母がほんの一年前くらいに初めて祖父の口から聞いた話でした。それを私に涙ながらに話してくれたのです。いつも無口な祖父の影にはそんな苦々しい戦争の記憶があったのだということを私はその時初めて知りました。

しかし、戦争など体験していない私には、戦争の苦しみや悲惨さはほんの一握りも分かるものではありません。そこで私は尋ねたいのです。戦争の話聞いてそしてその次にいったい何をすればいいのでしょうか。

祖父の話に涙を流し、「火垂るの墓」を見て感動しているだけでは何にもならないのですよね。戦争を二度と繰り返さないために、私が今すべきことはいったい何なのでしょう。』

1990年代に小学校から高校時代を過ごした私は、戦争アニメ映画『火垂るの墓』、『対馬丸』や漫画『はだしのゲン』を見ることで戦争の悲惨さを知り、戦争体験者であった祖父が身近にいたことから、戦争は悪いものだという認識も根深く植え付けられました。また、朝日新聞への投書を機に、戦時中に教師をされていた方と知り合い、大学時代には子供たちに紙芝居や映画などを通して戦争の怖さを知ってもらうという活動や、小学生の頃所属していたガールスカウトにて指導者となり、ピースバックを送ることなどを通して子供たちと平和について考える活動を行うようになりました。しかし、平和への願いは強まるものの、当時の私には『戦争を繰り返さないために自分ができることは何か』という問いの答えを見つけることはできませんでした。

戦争について全く語らなかった祖父が戦争の話をするようになったのは寝たきりの生活が続くようになってからです。祖父が繰り返し語ったのは、運命を分けたとも言える徴兵時の話でした。

農家の次男であった祖父は、農家を継ぐのは長男であって、自分は農家を継ぎたくないという思いが強かったことから、徴兵時に自分の職業を“船頭”と伝えたそうです。もちろん、隣近所はほとんど農家であったため、祖父の幼なじみであった同期の子たちは皆“農家”出身として、歩兵隊となりました。一方、祖父は“船頭”として工兵隊の一員となり、南方戦線に送られました。終戦を迎え、国に戻ってきた祖父は、歩兵隊となった同期の仲間が全て亡くなったということを知ります。兄を早くに亡くした祖父は結局農家を継ぐことになり、亡くなった仲間の分もと、戦後の農地改革に全力で取り組み、農協の組合長も務めたそうです。自分だけが生還したことを後悔し続けた祖父は、結婚しても子どもができて孫ができて、喜びをうまく表現できず、私の中のイメージもいつも寡黙な祖父でした。

その祖父も2008年に87歳で亡くなりました。実際に戦争経験者が少なくなる中で、祖父から戦争当時の話を聞いたことがいかに貴重であったかを今実感しています。戦争経験者と接点を持てた最後の世代の一人として、今後いかに次世代に伝えていくかが私の研究テーマです。私が今こうして生きているのは、祖父が戦地から生きて還って来てくれたからであり、そのことを後悔し続けた祖父が少しでも報われるよう、戦争体験を風化させないことが私の使命であると感じています。